

アメリカにおける漢字教育

それから昭和51年の夏のことですが、「ドーマン博士の幼児開発法」で有名な、フィラデルフィアの人間能力開発研究所を訪問したことがあります。そのとき、そこで、アメリカの三歳の幼児たちが、「鳩」とか「鶴」というような漢字を学習していることを知りました。このことを私は知らないで行ったのですが、漢字教育もやっているというので、その教室を見せてもらいました。そこには日本の高校生でも読めないような漢字がカードになって用意されていました。どういう教え方をしているのか知りたかったのですが、夏休みだったため知ることができませんでした。それにしても、そういう漢字を三歳の幼児が学習している、ということだけは知ることができたのです。ドーマン博士が日本へ来たとき、私は、漢字教育の効果についていろいろ話をしました。おそらくそのときの話からドーマン博士はこの漢字教育を始めたのだと思います。

英語を話す国ですから、もちろん鶴に当たる言葉は crane と

いう綴りで学習します。しかし crane という綴りでこの言葉を学習するよりも、漢字で学習した方が早く言葉を覚えて、crane よりも鶴の方が早く読めるようになるそうです。すでにロサンゼルスでそういう実験をやった人がいるということを知りました。要するに英語を漢字で学習するわけです。アルファベットで綴られたものが読めるようになるのはなかなか難しいことですが、漢字だと、すぐ読めるようになるということです。

それから、crane という綴りで習った子どもは、これが鳥の仲間であるということを教えられない限りわからないのですけれども、漢字で習いますと、[krein] が鶴、[pidʒən] が鳩ですから、これらは同じ仲間だということが、ひとりで理解できるチャンスがあるわけです。また、まだ教わらない字が出てきても、これはよくはわからないけれども、鳥の仲間であるという見通しだけはずくわけです。この見通しをつけるということはすばらしい能力であって、それを幼児のときから養っておくと、いよいよその能力が増していくわけです。

ですから、早期の漢字教育は日本だけでなく、どこの国で

もやれることだと思います。特に漢文の構造からみると、これを英語で読む方が私どもが日本語で読むよりもはるかにやさしいと思います。たとえば、「私はあなたに本をあげる」と言うとき、「我与汝書」(我は・与える・汝に・書を)という中国語は、英語ではまったくその通りに、'I give you a book'と読むことができます。またこれを「私は本をあなたにあげる」というふうにしますと、我々は「我与フ二書ヲ於汝ニ一」というふうに行ったり戻ったりして読み、しかも「於」の字は読まないようにしています。ところが英語では、'I give a book to you' となって、「於」は to に当たるものとわかります。ですから、日本が長い年月をかけて、あっちへ行ったりこっちへ来たりするような読み方でようやく漢文を自分のものにしたのに対して、アメリカなどはすぐにでもできるのではないかとさえ思います。

ドーマン博士の場合は何を目的でやっているのか、私にはまだわかりません。おそらく英語を漢字で学習することによって、ものを見通す力、知能を向上させるのが彼の狙いではないかと思います。そしてそれがいい成果をあげれば、私なんか騒

いでいるより、日本でももっと注目されるのではないかと思います。(笑)

私の話は一応この辺でやめて、あとはご質問を受けたいと思います。

市原: どうもありがとうございました。漢字の持つ大きな力について、また漢字の早期教育が幼児、あるいは場合によっては精神薄弱児の知能の発達を従し、それによって話ができなかったのができるようになったというような、非常に興味深いことがらについてお話いただきました。これについて皆さんからご意見なりご質問なりをいただきたいと思います。